

宇宙屋が駆け出しの頃

稲宮 健一

先月の月例で職歴のことを話した。会社の最初の配属先は伊丹の製作所だった。構内で設計、製造、試験をした真空管時代のレーダーの一部である電子装置を1m程の箱に詰めた。時は昭和四〇年頃、この装置の設置場所は鹿児島県の内之浦射場である。その頃の内之浦ののんびりした田舎道中をお伝えします。

夕刻、荷物を持って神戸港へ行き、関西汽船（その頃の名前）に乗船、大部屋の船室に毛布一枚を掛け寝込み、別府に翌朝到着した。別府駅から日豊線、日南線に乗車、大きな荷物はドアの傍の空いている所に置き運搬、宅急便がなかった時代、少し面倒だが、これが一番確実な運搬方法だった。志布志駅で下車、そこから地域のバスセンターのある鹿屋に到着。ここでようやく内之浦行きのバスに乗車した。神戸、大阪には戦後の名残はもうないが、鹿屋は鹿児島独特の火山灰の白い大地と、未舗装の道路が普通だった。バスは今では見られないボンネットバスが数人の乗客をのせ、大隅半島の海側の山道を延々と走った。未舗装、石ころごろごろ、上り下りのすれ違は場所選んでいちいち徐行、乗っていて凸凹道の揺れが直接座席に直接伝わる、確か、五時間程かかって内之浦着。あまりの揺れで、夕刻到着も暫くはばてたまま。

内之浦は漁村で、湾内の狭い路地を通って定宿へ着く。明くる日は町の中心部である長坪地区から四km程離れた高台にある宮原地区に構内の舗装道路を通って移動する。ここがレーダーセンター地区で、高台の天辺の二、三百坪ほどの所に電子機器用の建屋と、屋上にはロケットを追尾できる直径四mのパラボラアンテナが設置されたいる。この部屋に伊丹から運んできた電子装置を装填した。

昼食のため、長坪の飯屋に移動、そこから遙か先まで見通せる太平洋の青い海原の眺望が美しかった。その女将さんは愛想のよいおばさん、しかし、地元の人と話す時の薩摩言葉は全く分からない。おかみさん曰く、江戸者は分らんよう喋ちよるよと。